

伊香保志

卷三

ル 4  
4888  
3





門 4  
號 4888  
卷 3

伊香保志下卷目錄

舊事

木暮氏古文書

附錄諸書抄出

萬葉伊加保歌并解

北國紀行

東路の裏

伊香保のみまらゆふら

赤城紀行

伊加保の古歌

宗祇終焉記

山吹日記

伊香保道の記

登榛名山記



下目録



遊船尾伊香保記

仁泉亭記

更衣日記

下目單

伊香保志下卷

東都 秋萍居士 輯

舊事

土人傳へ云人皇十一代垂仁天皇二年伊香保山温泉涌出は然き  
 ども上古の事を固より定むるは伊加保の地名の書を見たるを  
 かの萬葉集を始めと夫より古今集以下代の歌集に伊加保嶺伊加  
 保の沼と詠み又延喜式國史等に伊賀保の神と擧げたり當地をかく  
 古くより伊香保と稱しを群馬郡に屬し嘗て合村分郷せしむ  
 他より飛地中世も桃井の郷伊香保の莊の稱ありしとゞぞ分内といと  
 廣くはしり又そのうみを伊香保の神の神領ありし足利氏の世



上杉氏山の内 當國守護の守護ゆして平井城居て鎌倉の管領と  
 為りその長臣長尾氏と守護代として白井城に居らむその頃の  
 室の地を長尾氏に屬して天正年中の事あり後小田原の北條氏に屬して大正  
 十八年徳川氏關東より移り後井伊氏初箕輪より城し後の領とあり寛  
 永九年より徳川家直領となり當國岩鼻代官所の支配とあり承  
 應二年改めて檢地ありて村高二百四十石餘あり定めれる悉く公租申  
 付ありて後元祿五年より十四戸の宅地も公租申付らる又伊香保の沼を元來當村に屬して沼  
 の西ありて大神峠と村界をせして寛文六年治と小富士の地は就き  
 地界の公事起り榛名山別當より官へ出願せ趣りてその頃官より  
 沼と榛名山の神の御手洗池を命じり沼の地を榛名山に屬せる

ことごとくをあらね近とを慶應二年より岩鼻より代官と郡代に改め  
 られ明治元年六月より岩鼻縣の管轄となり同年十一月より前橋  
 藩より移り明治四年十月より群馬縣となり六年六月廢縣して  
 熊谷縣に移り九年八月より群馬縣の管轄となり  
 大の温泉垂仁帝の世に開けたりと言ひ傳へるもその浴場に没  
 け人の來り浴みすることを何所の改めありて知らますは萬  
 葉以下代の歌集より伊香保の名を見ゆれど湯の事を見えるは此の  
 湯の事の書に出でたる初めを北國紀行りて文明十八年足利將軍義  
 惠法印一七日此湯に浴せし事見え又宗祇終焉記り文龜二年政義尚の世竟  
 將軍義連歌師宗祇此湯中風の病によりと入りて見えるは



二書の文流 その流を夙と湯治する地を今を久しきと知られ  
 たり抄出す たまた又その頃人家を今の湯元の地より引寄せ天正四年に今の地より  
 後 後より引寄せたり 末の仁泉亭記 近き世をふめてを此湯の奇効  
 といふこと愈せり 其二三と摘録し 殊に近年泉質の分析をせよ希代乃  
 名湯あること高く世より知られを縉紳貴頭の人此より遊び且を病  
 と養ひ且を暑を避くること年々追ひ盛なり特に明治十二年泰考  
 皇太后宮此温泉へ行啓しせらるる七月十七日東京に立たせ  
 給ひ御道筋中仙道より寄り湯川を歴て廿日當所へ着御りり木  
 暮八郎の家と假の御旅館と定めらる供奉の女官に典侍萬里小路幸子

下ノ二

掌侍錦織隆子 命婦以て皇太后宮大夫萬  
 里小路博房 宮内大書記官香川敬三 三等侍醫竹内信其 外近衛尉官  
 宮内判任官以下凡供奉の者百餘人あり廿三日向山へ遊歩せせら  
 る八月二日此を出立せたまひ湯川より前橋を過ぐ東系へ還御を  
 せしめ 御逗留の中より落雷ありしを未系より 避雷柱を取寄せ  
 後より引寄せたり伊香保の道もまづ里に落雷あり 常より落雷少しと土人を以て

村民八氏の事

當村民の古より住居する考を木暮岸島田 以上三氏を各 大島千明  
 永井後淵福田の八氏に本末合せを十四戸けり土人れを大屋と稱



一 當村より高二百四十餘石并山林等土地所有の民を此十四戸に限  
 まりその外古より譜代門屋と稱する者八十四戸ありて皆八氏の後裔  
 ありしが維新の波を一樣の村民をまき又他より移り住める者もこれと  
 今百六十餘戸 土地を拓つ者と今尚大屋十四戸を限する  
 八氏の家を大抵天正年中白井の長尾氏の遺臣に後々郷士となる  
 徳川氏の始當村より三國裏往還の關所中巻を設け村民を以て守らしめ  
 岩鼻代官の支配を然るまじく給料多く唯槍鐵砲等の武器を給せられし  
 のに延享三年丙寅官より帶刀改めり是に當村にを口留番所たりし依り  
 十三人の者福田氏關の内には年番の者のみ二人に帶刀をまき旨代官伊奈半  
 より申渡され夫を關所の勤め係りをも尚苗字帶刀を維新の初

子至まり又その次を十四家の者常に村西の年寄を稱しその内子  
 福田氏と島田氏の分家權右衛門と稱する者とを除き他の十二家より  
 者二人の年番はを名まじし關所を守まり但し十二家を十二支  
 子當るその當まる年を本番を以て勤めたるを  
 當村温泉涌口八箇所の中に四箇所を千明氏の所者にして外四箇所  
 を十四家の共有あり泉を導き風呂場を設けり亦十四家の專有に  
 て湯元宿の稱あり泉を引き用るるを算の桶の口径各四寸湯の深  
 各四分を制し風呂場を家毎に四箇所を定むるなり  
 次の文書を文化七年夏江戸駒込片所の上野屋庄九郎よりくる若流  
 質の鎧櫃の中より得たるを今の木暮八郎の祖父より送りしその



あり此の書に徳川氏の始り白井長尾氏の子孫の他國より移住し考案  
 國の有川某子その祖先の舊跡古傳を質問せしむ答にその見ゆその  
 文頗長し今伊香保の事に係る所の抄出さるる如し長尾  
 氏の遺臣あるを證せし

上略 御先祖之被召仕候者之子孫今當國ニ居合候分之名  
 付名跡次候者壹人宛書付進上申候伊香保屋鋪者  
 十二間乗手之名付木暮下總子金太夫同八左衛門岸  
 弾正孫六左衛門岸圖書跡無之大島勘解由子甚右衛  
 門木暮新八跡無之千木良出羽孫三郎左衛門此分皆  
 御譜代相傳之者共白井城廻在郷羅在候今度我等方へ

被遣候御判為見申候處彼者共再三頂戴難有由申候

下略 木暮新八跡無しとありれど今の

木暮武録と新八跡あり

止毛志新此温泉取立たるを輝景白井の長旗下木暮下總守

岸筑前守外都合十二人ありあり然まど八氏の内最古き者

を千明氏と見ゆ千明古を千木良をも書く湯元の地を古く千明

氏の所有にして往時を定家子家居し文龜の頃連歌師宗祇

千明氏子宿屋室仁泉亭を名づけしを即湯元の地とす

の事ありや今湯元に千明元屋敷の稱あり湯の事に付

てを千明氏の由緒最重し現に温泉浦口八處の半を千明氏の有し

仁泉亭の記を據まざり千百年前を僅かある村民湯元の



地子任み其地も村民も共々皆千明氏の屬ありに後元龜天正の頃當郡武田氏に屬せし時千明氏の嗣子幼くして母老ゆ餘民相謀りて有司に告げ村々今地に移し温泉の業を営む土人今亦傳へて天正四年武田氏地を七民に分ち賜ふれり其の時其の事なる七民を千明岸、木暮、大島、後閑、望月、今永井氏、島田、之再分ちて十四戸を各各に各各に温泉を引く官又其の法を定め千明氏に於て世に其の事を行はしむる所の地その所有なきを云と云ふ所の仁泉亭記 然るに其の流次の木暮氏の傳ふる所と異あり併せ見るとし次子岸氏の祖先を往昔伊香保神社の神主ありしを以てその祖某の墓今亦神社の側に在り又天正の頃岸

筑前介安兼、少将で醫王寺を創基す 案ずるに古と千明氏温泉の地と有し岸氏神社と守臣の事ありしを永祿中武田氏當國に役へしうち西氏武田氏に屬し天正中子至りて餘の五氏外より本里を共々此の地を分ち賜ふり武田滅びて後七氏共に長尾氏に從ひ 大島氏を新田郡大島村より出で新田氏の支向ありしありし 安永年中高山彦九郎が大島氏を訪ひて系圖調べし事あり下赤城紀行也 島田権右衛門の家を後分ち福田氏も後興まる家ありしといへり 或云ふれも島田平 當村往年より屢火災ありて各家皆その舊記を失ひて文書の徴なきは 但し木暮八郎の家子僅に叔通の古文書系圖を存せり據るを以て輯め左に記す 木暮氏を 村上源氏より赤松 其の祖也下總守祐利と云代に伊香保村に住居し此の地を領せ祐利天文年中當國平井の上杉氏より



従ひたに天正二十年上杉氏滅亡の後に母方の祖父より箕輪乃長  
 野業政中巻の箕輪の部見を申合せたり武田信玄箕輪を亡び後  
 を武田家より従ひ天正四年丙子四月祐利入道し武田勝頼より法名  
 成存真成と存心ともまはを興へらる同十年武田家亡び成存真の子  
 一總守祐行を共子白井の長尾輝宗入道威玄子屬し持高の地を  
 所務し之當村の支配申し付り入澤口阿久津村の地を  
 三拾貫文を安堵し騎馬六騎足輕二十人召具し軍役を勤む白  
 井落城の後に小田原の北條家と申通じその後天正十八年徳川家  
 東より移られし時忠正即し同年井伊直政箕輪の城主とあり此地の  
 地を領するに及び存真父子を客分よりつらつらに瀧が原陣の町直政の所望

子但せ祐行の次男藤太郎を直政が子に屬けて出陣せむ井伊氏近江の  
 佐和山より移る後近江國犬上郡大尼子村より知行二百石興り直の二字給  
 たり名を直信とす後大坂を陣の町井伊直孝に從ひて武功あり  
 後父老し故郷より近江へ呼迎へんとす代々居住の地より難後  
 兄を早世し父も歿し多し直信井伊家を暇とてひて伊香保へ歸り家  
 業相續して浪令をある然るに由緒の家のありて郷士にたりて騎馬五  
 種召具し軍役勤むべき旨申渡され代々用言怠ること成存真を祐行  
 子家と譲りて天正十一年十一月薬師堂屋敷今の八郎の屋敷ありに隠居す  
 祐行が次男藤太郎直信家を継ぎ改め金太夫と稱し三男藤次郎祐  
 直を祖父が隠居の後を相續して名を八左衛門と改め今ハ八郎と云祐直の次男新



八郎別家（ごうけ）武大夫（ぶたいふ）改稱（かいかう）此の三家代（このさんか）その名を継ぎ今  
 至（いた）寛永九年（かんえいきゅうねん）當村代官（たうむらしろ）支配（し）とありしを以来（いらい）を百姓（ひやくしやう）並の  
 姿（すがた）やふゆを歎（なげ）き直信（なおのぶ）の子直盛（なおのり）寶永三年（ほうえいさんねん）先規（せんぎ）のめく地士（ぢし）とあり  
 騎馬（かば）足輕（あしやう）の軍役（ぐんやく）を勤（こ）めんを以て出願（しゅつがん）せし事ありその後（のち）延享二年（えんきやうにねん）當村  
 藩（はん）所當番（しやうたうばん）二人の老（らう）と帶刀（たうたう）を以て定められしに依て寶曆五年（ほうれきごねん）同  
 八年（はちねん）再度（ふたたび）先規（せんぎ）のめく出願（しゅつがん）せしかが免許（めんぎょ）無し先祖（せんぞ）存真（ぞんしん）入道（にゅうだう）隱  
 居（い）の河自（かみ）携（たづ）へたるを望見（ぼうけん）とて古文書（こぶんしょ）數十通（そくじゅうつう）今皆（いまみな）八郎（はちらう）が家（いへ）に傳（たづ）  
 へたり今その内（うち）を摹寫（もしやう）しを掲（か）ぐこの外（ほか）木暮氏（きこし）一族（いちぞく）より尚（なほ）古文書  
 刀劍（たうけん）の類（るい）許（ゆる）多（おほ）傳（たづ）へたりしが代（か）の敷度（しきど）の火災（かさい）より失（う）せ今を傳（たづ）  
 へたり

木暮祐利入道（きよむらゆうり にゅうだう）スル時  
 武田勝頼（たけだかつらゆき）ヨリ與（あ）ハレ  
 レ法名（ほうな）ナル朱印（しゆいん）奇古（きこ）  
 リ勝頼（かつらゆき）ノ印（いん）ト見（み）エタリ  
 原書（げんしょ）ハ大奉書（たいほうしょ）紙横（しよこ）ニ  
 折中央（せちゆう）ニ此名（このな）ヲ書（か）ヘ末  
 二年（にねん）月（つき）ヲ書（か）ス大サスニ  
 テ圖（ず）ノ如（ごと）シ今縮メ寫ス



存真

天保六年（てんぽう六年）丙子

伊藤存真



大如圖

力以年之秋以今刀  
一腰到系在秋以何  
一振考之公表秋詞  
計一公馬主河安岸有

了了了了了了了了

心之去勝賴



印朱ナリ

此勝頼ヨリ與ヘラレシカハ左  
文字ナリト云フ全傳ハス真田安  
房守昌幸ハ沼田ノ城主ナリキ

存真



縮寫二分之一

定

- 一湯坪 并持高之事
- 一火漣之事
- 一酒運之事
- 一入沢口 拾英文
- 一河之津村 誠接英文

長尾輝景ノ  
一尚拾遺ニ  
委シ

右如前之取以者也

天正十年

并

上州白井城主長尾輝景後二入道  
字ナリ阿久津村ハ澁川ノ東北ニアリ

事書山邊ノ久

天正十年八月十日



# 定

一 他取<sup>レ</sup>此<sup>レ</sup>淨<sup>レ</sup>眼<sup>レ</sup>白<sup>レ</sup>垢<sup>レ</sup>目<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>間<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>  
 一 手<sup>レ</sup>越<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>  
 一 湯<sup>レ</sup>浴<sup>レ</sup>者<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>心<sup>レ</sup>欲<sup>レ</sup>脱<sup>レ</sup>人<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>衣<sup>レ</sup>者<sup>レ</sup>  
 一 淨<sup>レ</sup>香<sup>レ</sup>法<sup>レ</sup>以<sup>レ</sup>香<sup>レ</sup>土<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>粉<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>  
 一 湯<sup>レ</sup>積<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>候<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>お<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>  
 一 亦<sup>レ</sup>主<sup>レ</sup>地<sup>レ</sup>何<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>女<sup>レ</sup>具<sup>レ</sup>未<sup>レ</sup>成<sup>レ</sup>者<sup>レ</sup>候<sup>レ</sup>候<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>

本<sup>レ</sup>書<sup>レ</sup>下<sup>レ</sup>端<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>な<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>出<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>候<sup>レ</sup>候<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>  
 一 候<sup>レ</sup>者<sup>レ</sup>候<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>  
 右<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>如<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>候<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>候<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>

天<sup>レ</sup>正<sup>レ</sup>十<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>日<sup>レ</sup>未<sup>レ</sup>三<sup>レ</sup>月<sup>レ</sup>廿<sup>レ</sup>四<sup>レ</sup>日<sup>レ</sup>也<sup>レ</sup>



此文書誰人ヨリ下ニヤ詳  
ナラズ花押モ知レガタシ

縮寫二分之一



伊種保志

天香樓藏

縮寫二分之一

室

伊種保

一 <sup>イッ</sup> 此は淫靡なる若用公心若  
 ちやうちむの志を二江の井  
 一 之に對して海に備へ事  
 一 及若輩は死をりてとら

とくふぬの二か樹の  
 右三ヶ条を遠花の軍一志可  
 庸最科者也何必伴

天正十二

十月日

五

本堂中宿り及

花押ハ長尾輝景ノナリ

天香樓藏 辛



縮寫三分之一

定

一 傳ハクナ六フクビキ官シ行シ之シ事シ

一 六シ之シ事シ

一 國シ貨シ之シ事シ

右三ヶ条並シ之シ傳シ事シ

の件

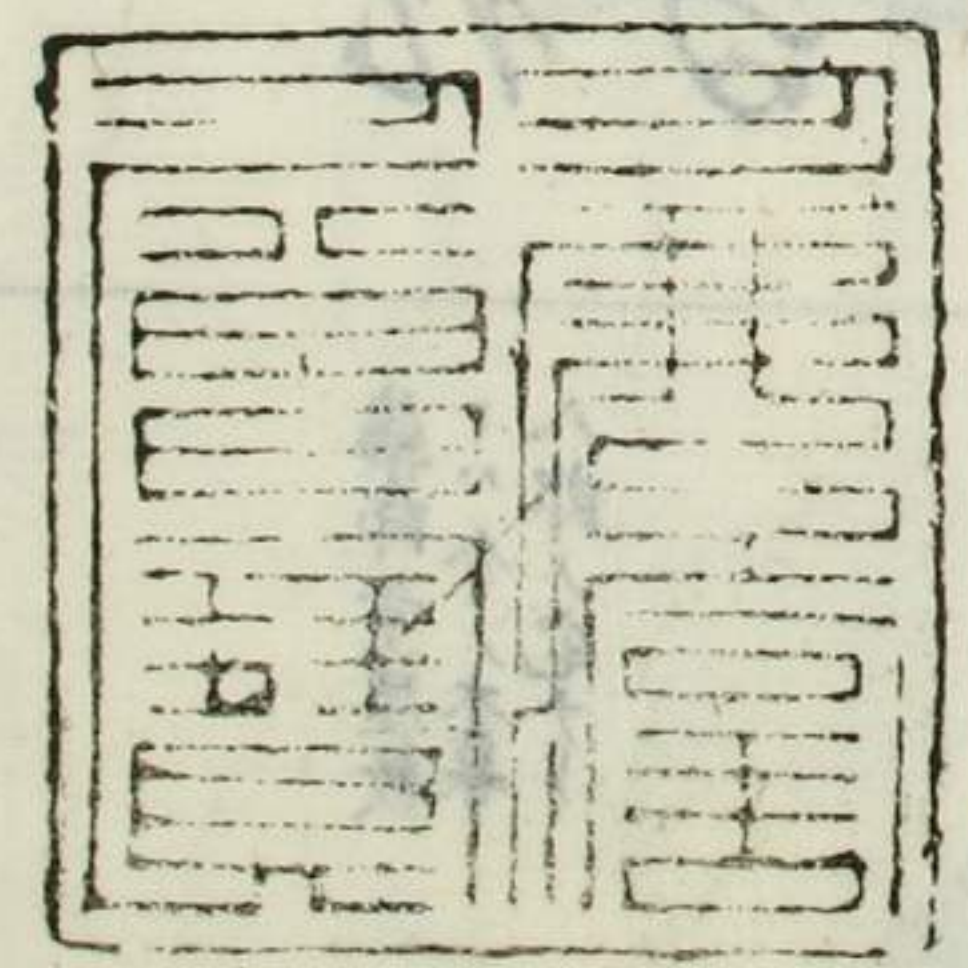
此文書何處ヨリ出デタルヤ知ルベカラズ

天正十三年

二月十八日

本堂下流

印  
僧 佛  
寶 法





定

藥師堂屋敷  
酒徳之正厚取白  
右通之并流之  
相伊之命之  
炬一挺之走廻者

縮寫  
三分之二

藥師堂屋敷  
トハ合ノ木暮  
八郎ノ宅ナリ

可謂之者也似此

天正六年

十一月廿九日

種魚

本草



縮寫二分之一

後目言長成中一極折見所要山依正  
影月之青級意外山部中一上意傳方  
似竹の家康直語王度中江乃進。後  
皇之境今起山江乃又稱獨一合利其  
表松山於併和伯着下江之江之  
追而現其乃為鯨合年々

二月廿日

本堂下流



一合八二匣ナリ天正十年瀧川一益前橋ヲ去ル  
後小田原ヨリ併和伊豫守倉賀野ニ来リ居リ  
上州ノ事ヲ執行ストアリ併和伯耆其一族カ

本堂下流





縮寫二分之一

知りて事

如上部

合式百名 大尾子松

右文重政ら

丑歲略慶長六年辛丑

山端の面を物玉

長長六年九月十日重継

井伊直政慶長六年二月上州高崎ヨリ近江位和山へ移封セラル同七年直政卒長子直繼後嗣同九年春佐和山ヨリ彦根ニ移リ同十九年十二月弟直孝ニ家ヲ譲ル木暮藤太郎ノ事ハ本文ニ委シ

本意為る

縮寫二分之一

作和山江紙

甲別

より日

慶長六年

丹

名

本意為る

岡本半介井伊家三名高キ家老ノ家ナリ



木暮氏略系

源祐利

木暮下總守

入道存真

天正十八年八月朔日歿

祐行

木暮下總守

實惣社勝山城主關口若狭守次男  
室祐利長女

某

木暮弥次郎廿五歲歿

直信

木暮藤太郎後金太夫  
仕井伊家後歸繼家

直盛

木暮金太夫

直定

木暮金太夫  
寶永

祐直

木暮藤次郎後八左衛門

則藤

木暮八左衛門

則重

木暮八左衛門  
延寶七年十月  
八日歿

承祖父祐利隱居別家之  
後  
正保五年二月八日歿

某

木暮新八郎後武太夫  
為叔父直信猶子別家

某

木暮武太夫

○附錄諸書抄出

萬葉集伊加保歌并解

萬葉集十四の卷上野歌の由り伊加保の歌九首あり今左より  
萬葉考并予橋本直香の萬葉上野歌解より予をその大意を解  
く末より伊波保呂安菴  
山子持山の歌を附す

伊加保の雨雲以續きかぬまつく人ぞおろし  
以て疾し見守  
るを詞のつらつと助辭あり以て護語ありかぬまつく  
の解けに  
或云かを護語をそ沿馴くの義を或云加治やり池ありと  
其地知られず或云束の間の物なると歎とをわらわす  
同  
しく言ひ騷く義あり見守の女せり  
大意を伊香保より雨雲の連續より羣を護つめく汝を故  
り



子人言ひ騒がしうを今を否まがいにや諸やも寝しあ  
と妹等しといふを

伊加保の岨の榛乃糸生ひ茂里をかくくたぐり

岨と山の峙てふ處あり榛の如く今のまのまを古栗萩

ありといふ統りれ余を取らば説長けま略す

大意を伊香保の岨の榛乃糸生ひ茂里をかくくたぐり

奥深く物どか糸を思ふと勿き眼の何よりなう冥くは末

を末のよりとて今先達せんやを

伊加保のやまの樋より霞の虹の頭もも指寐を拵寐をぞ

やとを八尺より深き心もいひ或を彌坂を坂多きを友やも

い或を湯坂の轉を今伊香保温泉の地をまほもい堰を

田の水を湛へけく處を今水澤村の井出野の舊地を或

と井出村をともいふ共中巻に或を伊香保の沿水の落つる處

と井手又やまのやいも云此統疑はし或を萩原村利根川の

町許あり名水なり坂より井より各敷八のりありといふ

にどの訛頭もを頭もまの訛あり指寐を男女互に手で

指し交へる寐を事なす

大意を伊加保の堰より霞の上の虹のやうや人子頭を

り考るとも思ふ人や飽くまも指しちのり寐を嬉し

かむとあり或を末頭を悪しやもいひを相寐をことを得



しつぱの意ありともし

上野の伊加保の沼子植多小水葱新恋ひんと種求めむ

ぬそ之あり水葱の水草は今云水乃少ひありその葉の細き

小水葱やつゝ花紫くく以て美しく古を植多食用や

大意をかく意しかくむやてを言ひ初めは種を植多たふ小

水葱を借多を種求めむ寄や

伊加保夫よなつしけ思ひとる隠こそ考つと忘きをあや

夫をかりし男ありあつしけ以下解き難し集中の難歌あり

とつゝ或云なつしけをあつしけ繁にの義攷やとつゝを雖乃

訛あり隠を隠事には忍び逢ふ事あり為あふと為ぬの延

びたらあや

大意を伊香保子人ら思ふ男を吾をありく繁く思へども男

をつゝあとのみまらあつしけ訪ひも来ぬその男を忍びく隠事

せしが忘られぬといふ意

伊加保嶺より雷ふ鳴り雷鳴り方にて故を多と見守り依りて

大意の伊香保嶺より雷鳴りて勿れ吾が方にて何事も無かれど

も妹の怖るに依りて雷鳴りてあられをな

伊加保風吹く日吹くぬ目けりて我が意の海可ありあや

大意を伊香保山中吹きぬる風を吹く目も吹くぬ目も

やも吾が人々意をなつしけを止む時法とあり



上野ぬ伊加保の嶺より降り雪の行き過ぎを頼み妹が家の河より  
 降り雪を降る雪の俚言は雪々行きゆくかけたり  
 大意を妹が家の雪成り心残り行き過ぎをうねとあり  
 伊加保の嶺の榛原伐り衣を着依りしよ直り思へど  
 依りしを依りの延あり榛を皮はる物と漆め又若葉は衣  
 子摺り著けし漆むこれせ摺衣なり  
 大意を榛の葉を衣子摺り着け漆むぬ妹が吾子著  
 依りヨマアその妹が心一向におりいひしとあり  
 伊波保の嶺のつら松隈より君が末まを心しやまを  
 伊波保をその地詳より或を伊何保の誤あるん前二首乃

嶺の榛原と語氣同じしをあり  
 大意を伊加保の嶺の小松原の外を崖に限りぬめく君の  
 絶え限りを末ぬを心しやまを  
 上野ぬ安蘊山着野成廣み延ひしものを何れ絶えむ  
 安蘊山の解を中巻より出でたる葛を流く蔓草せし  
 大意を安蘊山の裾野の廣きが故子着の心乃また遠く長  
 く延ひ互りしめ互の中あれ今を如何なりすとも絶えぬ  
 せしやまを  
 子持山より紅葉づまを痛むを思ふ酒を何れ思ふ  
 子持山を群馬郡の北部中山峠の東より上白井村に属す即















置まぬ上野國津とりの湯子入を駿河國子罷歸之の  
 由思ひ立ちぬるといへど宗祇老人略の伴ひ侍を略と  
 信濃路子略廿六日文龜二年二月やつ子津とりの湯子つまぬ回  
 路子伊香保とりの名所の湯の中風の為子とて宗  
 祇を其方子趣おぼしめまきとて五月の短夜せしむるに  
 湯子ぬき車もふくと五月の短夜せしむるに  
 此後宗祇を武蔵子至りて病甚しく相摸の箱根の湯本子至りて死す文龜  
 二年七月三十日八十二歳あり門人宗長宛て送るを駿州津の黄瀬川の上一里津  
 桃園山空輪寺子葬る宗祇を紀伊の有田郡藤並莊  
 の人飯尾氏あり幼に律僧とあり連子長ず

東路の裏

釋宗長

略永正二年八月十日九月上野國新田の庄子大澤下總守宿所は草津  
 湯治のまのひふとて六七日子ありて静喜に又連歌あり  
 妙屋衣まのやのわやの枕綱子旅の心とて人信るを越州義向  
 の心こころの由よしの静謐せいぎの心こころの草津二日路かき  
 隔へて大胡上總介館たこの略りやく長月四日ありて野山を過あ  
 青柳あやなぎの里さとの略りやく此の空くうを伊香保のいこうほ  
 替かり無なる日ひの荒時あらし和泉入道宿所よりいづみ立寄たちよるべきあり  
 替かり夕日ゆふひの思おもひを



屋少れとをまろれし終の夕日一う柳

略もま河といふ處より松田加賀守法體とて宗繁此十年修り  
小のくと言ひつは修り八九年の先の年宗祇此路より相伴ひて  
信濃路より例あしむりしより此宿所は廿日餘を逗留懇切の  
忘を難き事ありし略

宗長を駿河國益頭郡島田驛の鍛工の子あり或云近江の北村の人暮年より駿  
州より住むと駿河の守護合川義忠より仕ふ後僧とあり宗祇より連延と學ぶ  
此書を駿河より白川の瀬で見んとて旅せる紀  
行あり享祿元年三月十六日八十五歳歿す

山吹日記

日下部高秀

箕輪の故城跡西門の跡はり空堀三重櫓臺西南を居し山川廻り  
流る西郭の間石二つありと云 矢原村 柏水箕輪の間 龍門寺を業平終臣

のますらひ住るひし所をいへば長野氏をその末葉の 箕輪の  
城跡より東の方八町許より椿名大神宮まあり石室の上より宮居立  
る見申式は椿名をいへば椿名の方ありしなり神名帳の頭注  
こそ椿名椿名一山と訓ゆ 此事誤る前の三神  
の辨の部より論せり 椿名石神村の畠中  
より忠懐忠存の墓より建武の次此二人を吉野の御味方頼印を  
上巻座主の池の 足利方より斯より戦ひ兩人討死せしを英皇と傳ふ  
交見合をべし 椿名大明神を元湯彦命と満行將軍を埴安大神といふ  
元湯彦命と申す御名を大成經より出たる説をいふし其のまを  
り見えぬぞ用ひつし満行將軍の名もまをく聞えぬぞおがつの  
ふし埴安大神と申すまをくまをくしきまをくあり 夜々けそ



慈悲心鳥の亭をむく聞と 榛名の沼子至るぬ古の伊香保  
 の沼あるべし沼の汀子をむく墓の標はあり是を昔緑野郡の木  
 部何某やのやいひけふ人の此沼子身と沈めたるが墓あり古ま  
 標を水子入を失せぬが再作を立たるありといふは石を古ま  
 やうありを善く見ると明德の二字あり 此二ツの墓事跡誤き 以か不  
 王中巻とんべし  
 乃のそのひのをもむくを沼より伊香保の間あるべし 氷室が岳の  
 傍子岩垣山といひありそのかえり池あり座主の他といひ頼印  
 座主の住みし所やうや岩垣沼やよむし所と名と思へど古ま歌  
 子よありも打もせたるやういふは是所の名あるべしと思へば  
 湯前明神を拜み奉るるが伊香保の神社あるまき 水澤の左子

船尾山そびえたり傳教大師の開基はを若を大寺にせ城千葉介  
 胤正攻め止がくを今を寺は 有馬村に甲波宿禰の社あり  
 御旅所の

日下部高秀、字東進、仁良齋と号す、通称を今條貞右衛門寶曆元年歿す、  
 塙保己一を此人より學びしとあり、此山吹日記原本手より入る、今上野名跡志の  
 引く所也  
 抄出す

伊香保の道ゆきうす

倭文女

上畧上毛野の伊香保より出湯ゆみそを母やじ乃其のじ  
 伴ひ給ふれを流生の十日まをむとむ 寛延三年三月十一日  
 又ねやまのりやむく覚ゆるわをまを送る間を以のわ風正  
 まをうれよを雪も消ぬゆるといふをまをりまを畧日たる漱



川てふ川神流川を武蔵と上野の間はなほ遠方の雲より海にひ  
 て見ゆるを信濃ある沙間の岳や志の成る後なる伊加保原ふ  
 里やれんりふ畧妙義の成るより来る畧志のものを待たしは  
 至り林間の里てふあるを山々のやうにまきと標名の山を以て  
 神さびけきま指をさすたる人かき巖まきと峯のよきあふと繪  
 しもゆと見知らぬとゆふありゆふありゆふありゆふありゆふ  
 何げとの岳を霞を煙もえかき伊香保の沼と河津を此より  
 少くもいふとある人も此大神の流を洗せといひくたきある沼の  
 へりやとある人かき山にひかきかきとゆふありゆふありゆふ  
 り至るをとくくもわがやう更とまきたり畧目長けとわがやう

るやむぐぐの二つせうおひあるをまきとゆふありゆふありゆふ  
 隠せらる折りておひある外面の梢ども乃中より櫛の一本  
 まがきとまきとまきとまきとまきとまきとまきとまきとまきと  
 こつとまきとまきとまきとまきとまきとまきとまきとまきとまきと  
 昨るまきとまきとまきとまきとまきとまきとまきとまきとまきと  
 ぬきとまきとまきとまきとまきとまきとまきとまきとまきとまきと  
 雲ふありまきとまきとまきとまきとまきとまきとまきとまきとまきと  
 佛のまきとまきとまきとまきとまきとまきとまきとまきとまきと  
 ありまきとまきとまきとまきとまきとまきとまきとまきとまきと  
 とこそまきとまきとまきとまきとまきとまきとまきとまきとまきと







此の志をばしたるは里よりいつかか習はしなりといつて実を言  
ふへは終も夢もしぬべきものなりを畧かかすゆへに  
かたきの馬川と度る下畧

此倭文といふ女子を江戸の弓町に住める某の女を真淵の門より寛延三  
年十八歳にして此記と書と後夫持ちしが寶曆二年七月廿歳に死すその  
遺文ある此記并に消息文和歌ども集めて文布といふ一巻の寫本とあり  
傳りたり村田春道が寶曆八年の序に真淵翁が倭文女の碑文も載せたる  
又本文假名文あり多し  
漢字と交へ書きかへたり

伊香保道の記

山岡明阿彌

上野の國伊香保より出湯にんと思ひ立つ畧十二日 寶曆十四  
年四月 今  
日を伊香保より行きつゝりぬぬきや聞けといと嬉しく曉起きし  
かまつ此のまら 高寺 木曾の存るらぢあれど夜日より人の行きかひ

京橋町野油谷  
氏伊勢屋平右  
衛門ノ女子

志げく略 元宿とやらんし山安より便宜よりやそ細き路より入るりて  
ゆきぞ又田舎なつものから野とゆき山谷城より入るるゆき  
柏木より里に書けの餉より或人の物をひたれは雁の卵累ね  
たるるるたるる水の葉より盛るるりて来るる家よりはれは  
筈より盛るるるの或るるつじ此を里をたを程路遠し山も  
嶮しあどりし略 新うへ山路より入るゆき限あり遙かき心地  
すまの志を伊香保の山を眼の前に見ゆれば行く路を七尺又曲  
まら瓊のぬく佩のぬくのたをまらるるり似るれを只後方より  
歩むが如く行きあづる略 庭よりやく高う登るゆき打願をれ  
を仰きえし高き樹よりつしつは足底より見あされ向ひより見え赤城



の山も傍よりそのすれを實り遠くも木をすくるとのふとくうめくると左  
 面より右子移るを奥深く行きゆく水澤やういふ所より来はまね  
 あらにも觀世音菩薩立したまふ瀨のまきくまを十所より六の  
 番よりつとせまう御寺とぞ御堂もこの段管みまじしふとまきり  
 しく見ゆ略わく又山を回るを登りて右の方を尾崎まがく遠く  
 や見渡さるる利根川を帶のおと見ゆ木の度き高野の丘谷に渡  
 りて細う千條り分きたる路の縁せりおまへたるまきりその中子  
 人馬も小う羣るるを蟻といふ蟲の態野詣をせりいふふくは似たり  
 水澤といふを以づら水もほそそと成りまて又向ひの丘より上るる成黒  
 澤といふ路をすぬを白うもくらき多れ此の水無浮白澤をいふ

こまいへしやとちまきり言ひまはる斯くを行きて路の空  
 の叢せ分けをせらる流る水音聞ゆ略路ゆ人の是を温泉乃  
 流の末あるを教ふるがいと嬉しくまはるを近づきぬる成り  
 せちの草やを坂路せ上りてのらりてその居るまきりたたり  
 ままね略十三日朝より日高て起きいで見めぐらせを四方にまきり  
 むる山を屏風をまてたる状の山懐り見馴まぬ家ども多し作  
 りはけ多りあつて湯浴るとして入里来し人と老いたるも若も  
 もまきり行きゆひまのまきり物商人も夜日やいふ入里来し使  
 しまのまきりまのまきり略斯くも日敷も経まきり徒然と心  
 のゆくまきりもあつれば打連まきりまきり山空成見廻りまきり



里の状を度ぶ路を中にやまを相向ひて家を作し蛇を十餘  
 小路を十餘里二區開たる表裏に作し重たなを軒に  
 引き出し右に細き竈  
 湯浴むる人その槽に浸りて瀧に打たるるを  
 尾の長うに上りて作すのけたまを路の石の板し  
 て昇り降り此湯をその上つて遺るるを  
 水の公に低きに就き流きゆく形り略その町の  
 名に負ふ伊香保の神社立したる宮  
 居と物より神をびたり處の人を湯前大明神と申し奉るる

略後を瑠璃光如来立したる略見めくらせを御前なる  
 桃櫻の花を盛て咲きたるを以て略法師の  
 庵より立ち入る物問ひあはさる小田舎人を珍しう物よく覺る  
 此御神の縁起と語り種々の物乃形作せし又此たの比人の翁  
 愁し醫師の才を求むる山谷を求むる草木石塊を採り  
 きて末を略此のころを雨風あるを略夜を安んずる  
 せぬらる彼のよ吹けを宣ひし今もまと思ひ出づる伊  
 香保風を吹くをいせぬをいせぬをいせぬをいせぬをい  
 せぬをいせぬをいせぬをいせぬをいせぬをいせぬをい  
 せぬをいせぬをいせぬをいせぬをいせぬをいせぬをい



今日明日出立たんとすまゝの人のとまゝに惜み又來ん年も  
 かゝるべしとぞいへどもさす別れをいふは惜しむれど此住る  
 家の常に凭居し柱の算のまねを今もやて宿離さぬもやいへる  
 古言の付けしもいとをりげあるや舉月四日千故郷を重の文も  
 迎への人も來しや喜しと今いへるそのつとめて朝出立つ  
 略路もあつた住る家の向ひ谷より細き山路を登る嶮しくと  
 移る坂せぬと切通しをいへるさすもあはれを左右の山の腹も  
 路も皆白土の碎けたるが凝鹽の散り霰の吹き寄せたる状も上  
 坂行も足元いと危くもいへる是を冬の程をいへる寒き處は  
 皆氷に閉られも春にあはれを吹く碎け落つるやうとぞいへる

せ過ぐれも高き廣野を行く山の尾岬遠う長う見やらぬれを  
 あつ住る人の家のともは梢のゆきをいへる見ゆるが名残惜う隠る  
 まを願のませしる三國の山草津の山をゆき雪の消残をいへる覺斑  
 子見ゆるは行き盡せしるやたが假初の鶯の篠屋を立てり  
 人こゝろをいへる寄るも暫休ふもいへる瘦せしるも箱二人居る  
 なるる物語を背の山を相満の嶽並るも山をいへるつ嶽をい  
 へる湯のりやをいへる教ふもいへる風をいへる疾まをいへる時を今夏  
 の半をいへるまを空の景色を更衣をいへるの状をいへる野山の草木  
 もをいへる青みたるを尚枯をいへる砂をいへる茅蕪の高きをいへる  
 行くもいへる猪狼をいへる人をもいへる惡しき獣の晝も可やといへる



先と聞て予恐ろしき事いふは遠殊に行交ふ人さへも無  
 るに心細く心細く憂の状をいふは遠にさへもなまらふ心  
 せしむる乗物急が左の方より高き圓き山見ゆるを沼端の富士  
 山ぞりよとや實を略その山富士を覺えたり略その麓をめぐり  
 行くと前も後方も傍も皆山をまじりて立ち上る中にて思ふは  
 眼ももろり廣き池の山に翠よりほたる故にや藍なるも尚濃く  
 黒水なるもいふ状よりいふは伊香保の沼をまじりて水を氷草に  
 生ひぬ菰あはれぬものも見えぬ塵がたふち池の中心清く澄み  
 里を底ひも知らぬ遠く見えぬやまが連波の向もまじりて未寄せて洗ふ  
 岸は渚を礫石のまじりて敷き並みまじりていふは伊香保の山もまじりていふ

一向へる状に何の物恐ろしき事いふは遠にさへもなまらふ心  
 せしむる乗物急が左の方より高き圓き山見ゆるを沼端の富士  
 山ぞりよとや實を略その山富士を覺えたり略その麓をめぐり  
 行くと前も後方も傍も皆山をまじりて立ち上る中にて思ふは  
 眼ももろり廣き池の山に翠よりほたる故にや藍なるも尚濃く  
 黒水なるもいふ状よりいふは伊香保の沼をまじりて水を氷草に  
 生ひぬ菰あはれぬものも見えぬ塵がたふち池の中心清く澄み  
 里を底ひも知らぬ遠く見えぬやまが連波の向もまじりて未寄せて洗ふ  
 岸は渚を礫石のまじりて敷き並みまじりていふは伊香保の山もまじりていふ



伊香保志  
天香樓藏本

此池の主なるてぬりませばいふと捕らんて細引漁を  
誤るもさる可あは必雲起り波風荒まき火雨を降る  
聞らりそを憂がうやういひ恐るしてそのまじの梅  
いでけぬをういひ見もや山路せりまつ行く細谷川  
の石橋踏みよりて尚行けぬ程多し榛名の宮立したまふ  
空を此面彼面たる石のみ時より臂折るるを段階を登り  
えれば宮楹太しき多し干木たるの瑞垣ありて祝司  
が打ち鳴らす鼓も音のやう乙女が捲く袖もゆきより  
あはれなるを神のうやういひてさくらびりたるに  
る首籠石やうやうと塔の層は状したるを實に経るる年の

山岡左二右衛門  
門伴俊明字六  
子其隱居判髮  
シテ明阿弥陀  
佛イフ道阿  
弥ノ族ナリ安  
永九年庚子十  
月十五日京ノ  
旅寓中ニ歿ス  
狂名ヲ大藏十  
又トイフ

數々名もみまはし尚此外は吳服石山伏石地藏が嶽  
あどりのを皆その形の似たれば此名負ひたる多し斯書を數ふ  
るに人目とるあはしといひ危し御垣の傍に三本の杉といふ立り  
その下せ山川流る略鞍掛石を向ひの山乃峽なり名を聞にく  
くはどその状をいひ怪しう文珠の浄土より獅子の行きより橋の  
状にも似やしあんやうく山を降るるを行けぬ神主の家並み立  
たりありし略松枝の驛路よりたよりなきぬ略

本文婦人の書々々體子記しすて擬名のみならず今讀み易く  
為す漢字を交ふ明阿弥姓を伴名を俊明といふ幕府の道坊より真淵の  
門人  
あり

赤城紀行抄出

高山彦九郎

伊香保志  
天香樓藏本



安永二癸巳年十一月十八日大島甚左衛門所へ行丁大島氏の氏族と書留<sup>しりぞ</sup>る旅宿へ歸り温泉入

伊香保の神社へ禮服<sup>らいふく</sup>して參詣す町の南へ上り町屋とほく東西あり前より寺あり是を別當<sup>べつたう</sup>あり伊香保湯泉寺なり此社の上野國十二社の中にも伊香保の神社赤城神社一の宮の貫前<sup>ぬきまへ</sup>の神社を大三座といひ外を榛名山を小九座といひ伊香保の神社今を正一位湯前大明神<sup>むせん</sup>なり四十年計以前此号より神社寺僧乃守りたるすらすらかゝるに神号<sup>しんごう</sup>もまを改むことをいひんぞ湯前の神号の時も吉田より湯前明神別社<sup>むせん</sup>なり祀るべき由仰りし事大三社の其一を湯前の神に奉りて思ふが故とぞ神拜畢す

其後藥師堂あり回りと南向あり是を別當湯泉山醫王寺

なり神社なり社領もはしといふ中卷伊香保神社の裏并チ三神の辨の處見合まへし

登榛名山記天明二年 平澤元愷

毛人屢稱榛山之勝。今茲游四萬。便道以四月二十日登。略山在群馬郡。距松枝驛三十餘里。遙秀于百里外。其高可知。路唯阻溼。夙出驛舍。越風斷嶺。晡時乃抵其麓。略已抵山腹。略唯有松杉夾道。百尺千章。于雲霄。是可怡悅已。復前二三里。突兀巨石。嶮立路傍。高出於松杉之上。豈麻中之蓬者石耶。抑松杉欲與石抗耶。橫者架雲臥谿。如屋梁。如複道。如尺蠖之將信。愈登愈出。所謂如巨象。如狡獬。如虎踞鳳翔。腐語



飽太牢謂  
既探妙義金  
洞之奇也

未足狀也。然我曹已飽太牢。亦不易饜耳。神祠在巨石之間。磴道樓門。莊嚴殆歷廟貌。香火之盛。遂使山如此俗哉。豈人之佞神歟。將神之媚人耶。若不媚。何容佞者。求福之不回。豈有所不臻哉。問之祝司。乃曰。祀彥友尊。或曰美滿持尊。今祠稱滿行。其義未之詳也。傳說滿行事跡。陋滋甚。近時管轄東叡山云。神歟鬼歟。將佛陀歟。余卒不能辨。則不敢拜而下。若夫大黑岩。葛篋岩。龜甲岩。佛面岩。俯臨岩等。土人艷稱姑置。略維石巖々。奇則奇矣。漫遊文章抄出

游船尾山伊香保記

天明五年

同

今茲乙巳夏。余再游上毛。而主澁川村民田子正家。略遊船

尾山。山一名富饒。距澁川村。半日程。與伊香保相連。略戲作其文曰。如是我聞。富饒山有飛泉。其高四萬由旬。登此觀望。世界悉見。風景微妙。不可思議。我從緣起。此日同遊。與大達尊者。大察沙彌。優婆塞等四眾俱。欲重宣此事。而作其記。先抵水澤。憩觀音堂。經行林中。遂至瀑布。一心除亂。咸皆歡喜。水聲深妙。令人樂聞。乃與四眾。食飯飲水。如是施與。甘露醍醐。身意益力。隨喜無量。勇猛精進。遂登山頂。慇懃賞嘆。忽發一意。為四眾故。游伊香保。山路甚艱。伊香保地。去年九月。災火蔓延。盡為火宅。熱湯涌出。如阿鼻獄。爾時我等。為病惱故。沐浴此湯。洗諸欲染。患難悉除。快樂潔身。饑渴頓來。周憶熱



悶。搏飯殘餘。相集食噉。呵々大笑。走出火宅。稚少遊戲。歡娛樂著。雖無寶車。隨其所欲。衆意非一。自在無礙。重經空野。日沒歸家。是時五月。十有三日。尊者為誰。良珊寺僧。優婆塞何。田子心等。我則免道山人也。漫遊丈草抄出

平澤元愷稱五助。寬政三年歿。

### 仁泉亭記

吉田芝溪

在昔連歌師宗祇。浴此溫泉。命千明氏亭。曰仁泉。其義取之。溫泉能治病也。或曰。伊香保之地。稱村豪者。十有餘戶。各分視引溫泉。若取於泉。稱之仁乎。則比屋亦有焉。何獨以亭哉。曰。然。然是以今視古也。伊香保之地。未知其所。草創在何代。

也。萬葉之咏。既稱伊香保。則其所從來最尚矣。雖文獻不足徵矣。宅傳口碑。累世緜々。戶不更系。田不更主。僅々數民。居住湯源之地。千有餘歲。宗祇遊浴之日。以仁泉名此亭者。豈偶然哉。蓋宗祇親試湯泉有奇効。又親見發源之地及居民。皆悉為千明氏之有。而亭名遂以仁者。其形勢自使然也。其後元龜天心之際。郡屬武田氏。當是之時。千明氏嗣幼而母老。餘民相謀。告於有司。移村於今地。營業於溫泉。傳言天心四年。武田侯賜分地於七民。是也。七民乃木暮氏。岸氏。大島氏。後開氏。望月氏。島田氏。千明氏也。又分為十四戶。各視引溫泉。官又定視法。使千明氏世為視心。又以發源之地為其



所持也。於乎宗祇以泉德名此亭。餘澤覃闔村。以地則幽僻山隈。以耕則瘠土獸害。其民則僅々十四戶。然而千數百歲。孫々相續。永與温泉相終始者。亦泉德之餘慶。而吾毛中之奇村哉。近來村中數罹災。古書舊區。悉烏有。於是乎。主人托予以記。予向視宗祇之所書及先年宅址。今猶存于湯源。又久知闕閱之所由傳。遂取筆應其需爾。享和三年三月

吉田芝溪名友直字子心上毛群馬郡澁川驛人墓在澁川新田

更衣日記

多保子

文政のちやせまのえ申の卯月朔の日上野の國大間とある古里へ行くと由りしを伊香保の温泉にのみ孫子らよりを言ひおきて

出でたり。此の日を良人の大城へまゝ登り給ふやそ從者あどまへぬやふとやとを朝とくを門出の終る略やうく午の刻まゝ頃乗物いそいでて立ちつゝ三日より大間へ申すかゝる著き略きてもこの春を標名山やりの大御神の御戸開かせ給ふといふ伊香保の湯浴みかゝる話でもせよかしと人とそのついでに略同胞ありと人々案内をせしむる事やま定ぬ略十二日伊香保へとてまゝつづ略澁川の宿あり略の澁川に立ち一里のまゝ木しとせやう路を往來の人より逢ふに兩を以て障りありつゝ候しきふゆりく高き山を向ひしると思へどいつしその山も後よりあり又それよりありふる山



のひせゆく略りしあり程よく伊香保の里へ入るふその入る處  
 上層家居のなるより雨の側わきより大なる土花つちざらあど立ち並ならび  
 たるもえゆ木暮金古妻やいづか許もと宿借やどかりもぬたの里に湯宿と  
 いづか家十二りありとやそが中にもたの金古妻とよけて豊ゆたかある  
 家ありと聞きこひの里へ入る程家居の数た十とありありあをまづそ  
 り落おちつきま疾とく湯ゆのしみをえを急いそぎ行ゆおづたす  
 見みたり湯壺ゆつが三さんりありその壺つの壺つの大おほき豊ゆたかふりま  
 見みゆいの中なかに瀧たきへ落おちしたるその落おつる瀧たきの音ねまだ  
 聞ききありいぞいとおき後のちしう覚さゆ昨日きのう上層うへの雨あめゆたう名湯なとうぬは  
 中なかに略りとて入いるもえんとやをら入いるす思おもひはづらひしうを湯ゆを

屋やまのひそ肩かたを瀧たきへおたせあり後のちみます 略り食し事じとつへ  
 出でるを見れどまぐ器うつを何なにもたら清きらうの町まちも家うち々々乃すなはち皮かわ  
 む糸いとくく賑にぎはし書か過かし次つぎのやをありお湯ゆを煮にえんと  
 て饅頭まんじゅうじ折敷をしまと茶ちやのふ出でたを始はめ宿しゆく匠しやうまらうどに  
 もそふはなすいしと聞きゆ部屋へやへへ女に子こゆわぶと志しをく末すえも  
 雨あめ間まをそとら見渡みわたせ山やまと山やまと重おもきつひたるす霧きりはそと  
 又また又またの家うち乃すなはち前まへ裁ざいを見みるり梨なしの花はな盛さかりはさうへま  
 桃ももの葉は咲さき亂みだり江え戸とを欄らん七なな女に子こをま茶ちやをみま  
 かくゆををいし卯う月つき十日じゅうにちあり三日さんじつあり綿わた入いる衣えを  
 着きるのまをあり伊香保風い香保風ふうねやうにと誰たれもくみ



かまへし侍めぬ「伊香保山出湯乃をそをみあつて此の寒風より  
 足まやうじよじやま四方山の景色は屏風つくらも立て並べたんやうあり明  
 としどちをひいて榛名山へとあそびます路もちつ程二里半ありといふ  
 一里登りて足が平地ありといふありて一里つらといふ平地せなる  
 けく来しと思ひしに向ひの方より大なる水海みづうみの足ゆきつら驕あつきといふ  
 にはこの山乃上ふと怪あやしみつて行きて近とあるまじき足が大きな水  
 乃々とも思ふれ人々問へど此の山乃上ふと云ふ人の乃ありといふものゆゑ  
 少くも池を乃とりて山乃上ふの周々まわりの皆行くなり風おどろきつら寒し  
 か籠かごく男おとこももてものむきもてつらやまをがらふなり  
 のみほくたをまゆくも池の沼と聞ゆもつらぬもぬみ大御神

湯の古言  
 湯を乃れを  
 のし訛あやまり  
 湯端ゆづあり

の湯を洗みあらふし此のむらに高き山やま峰みねの形を富士を似たるあり  
 問へ榛名のふじとそをいふあり人々登りて「曇うらりなき鏡かがみと  
 もんもつらし心清こころくつら湯を此の池乃周々過ぎぬけりあり  
 亦少し登りて湯ありて鳥居とりゑありて茶賣ちやうばいの家二軒ありといふあり  
 十八町ありといふ此地も見渡す景色は好しそれより下りて湯を乃れ御み  
 葛籠くわらご岩と申すゆりけりゆきゆき呼ぶも湯を乃れ異ことなる岩を  
 近き處は湯をいひて仰あやぎても見まじきゆき遠き方より足が葛籠  
 と積つりたげたんやうに名ゆきゆき行きて湯番所ゆり杖つゑを立  
 ち杖をゆきゆき行きて湯番所ゆき石の階かたゆき登りて御社みやしろあり廣  
 前まへゆきゆきゆきゆき尊たみとてゆきゆきゆきゆき山を群馬の郡を居つ



まゝ本社満行権現鎮座したまふと名延喜式の椿名の社とある  
 をあはれありとぞいつの原より椿名の文字とあはれしや山の略図といふ  
 せ思ふや何れ乃詠みおけり松柱の梢をまじりて標名やま千  
 仞のいそやうは年々雪書いつもたけ実なり某が岳何岩と名  
 づけ姿異あるいそ海時をまじりて知らぬまじりてやその名のね  
 ありを覚ゆるもやうめがさづかぬ御姿岩をいへるを里人幣束岩と  
 いふ高きことを何木といふも知らるまじりて思ふや程の山を半より  
 うらみと覚しむまじりて大まある聲せまじりてさしてゆめ不思議ともわ  
 きまじりてその本尋ぬれどもい何某の院との申す坊に百目  
 の間大行せ修し満つる夜の丑の刺す立つと答ふまじりていふ

前の倭文女の記より

い尊し御前せりまじりて一町行けり鞍掛岩と申すゆめゆめ状  
 異ありまじりて少し行ゆり山門ゆめゆめをいへて御師町の軒あど  
 ありといふまじりて伊香保まじりてふ至るゆめゆめ山の背と覚ゆるまじりて  
 登りてまじりて前より番所といふ瀬口より社内より入るまじりて思へど  
 あれを裏口より瀬を知らぬまじりて表乃たを南よりゆめゆめ大鳥居より  
 二王門とやうくまじりて登りてまじりて繪圖ゆめゆめをいへて記しゆめ  
 人の記は標名の山をいへて神をいへて指を立てたるゆめゆめいへて  
 とまじりてゆめゆめあど画はしゆめゆめ見知らぬ状ありと記したるまじりて  
 ことなるまじりて標名の山よりゆめゆめ本をいへて神のゆめゆめをいへて  
 まじりてまじりて伊香保へその日ゆめゆめ過る路をいへてゆめゆめ見渡す



二岳の蒸湯  
は伊香保の湯  
と脈異なり

一ツ岳と云ふ高き山ふたつあり六の下は湯なりといふす  
はら伊香保の湯元ありまゝと相馬が岳やうついで高き山と見  
えそ程もより下路より恐はしむ處なりとて地獄谷といふこ  
下をぬれ湯の沸き出づる處へ落つといふ身の毛いびくといふ  
予恐はしとて窺ひもえびたを急ぎて伊香保へ着きて暫休  
らひを程よくして出でて流川より宿す

下略廿二日  
江戸へ歸る

この記を余が祖母が書かれしあり祖母を上野の國山田郡大岡々の里に吉田  
氏が女にそ先考磐翁が後母ありこの記をその母君乃回忌ありとてを  
故郷へ歸省なりし時の事なり時より年五十七後慈光尼と稱し天保八年丁酉五  
月十六日身まかり年七十おはしまし本支も假名書もふるを今多く漢字かへす

伊香保志下卷 大尾

伊香保ハ京河沼ト産

こゝそ名も小と稱の沼なり出づる温泉とて京河の神は出湯を  
すれやふしなりと云ふなりやたすそは京河の神なりと云ふ  
伊香保とてよかぬ世の山はたぬとも並びくふらやう  
築かざるをそとて京河の國の山をいふとて京河の出湯に  
守門ハ海薬の無しれよあひだも志らねとも日光産此  
神のたけつるふとて京河の神なりと云ふ京河の神に  
男は子ちやとあつらふ京河の赤城の山なりと云ふ京河の  
その川を京河と云ふ京河の神の山を中におく事あり  
海龍の山は橋名なりと云ふ京河の神の山なりと云ふ京河の  
わたり橋をたけつるふとて京河の神にたけつる事あり京河の  
よはるる京河の神にたけつる事あり京河の神にたけつる事あり



丸山と云ふはくわいありたるまゝたるそ物関山此中もまた之を  
 志す所となせあり言根の廣くはるる月より一ある  
 所の山氣をくまなく氣をひらつ二は岳とてある所の山氣を  
 いづれかの書とけめたるひのをわく海をわく山をわくは  
 を漸く誰より遠くも氣をくまなくひらつたはれわ  
 大島嶋田永井  
 岸  
 後關  
 天明  
 福田  
 木暮

伊香保  
 大月  
 栖霞

編者 秋萍居士  
 補助 木暮樂山  
 畫工 長命晏春  
 筆者 大月栖霞



伊  
作  
作  
天  
香  
林  
齋  
本

明治十四年四月十日版權免許  
同十五年六月一日發兌

編輯人

大槻文彦  
淺州區

出版人

竹中邦香  
同 日本橋區  
兜町四番地

發賣人

吉川半七  
東京京橋區  
南傳馬町二丁目

大槻文彦  
竹中邦香  
吉川半七  
南傳馬町二丁目



